

感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉 ～共感覚、自閉症、幼児の体験世界～

共感覚とは何か

岩崎純一

日本質的心理学会

2011年3月5日(土) 13:00～16:30

キャンパスプラザ京都 4F第4講義室

漢字の「感じ」

A 京都

B 显申考

漢字の「感じ」

A 京 都

B 显 伸

◆共感覚(Synaesthesia) ギリシャ語
=syn(共に) + aesthesis(感覚)

文字に色が見える＝色字

音に色が見える＝色聴(絶対音感者が多く持つ共感覚として知られる)

風景に音が聞こえる＝音視(色聴よりはまれ)

味に色が見える

匂いに色が見える

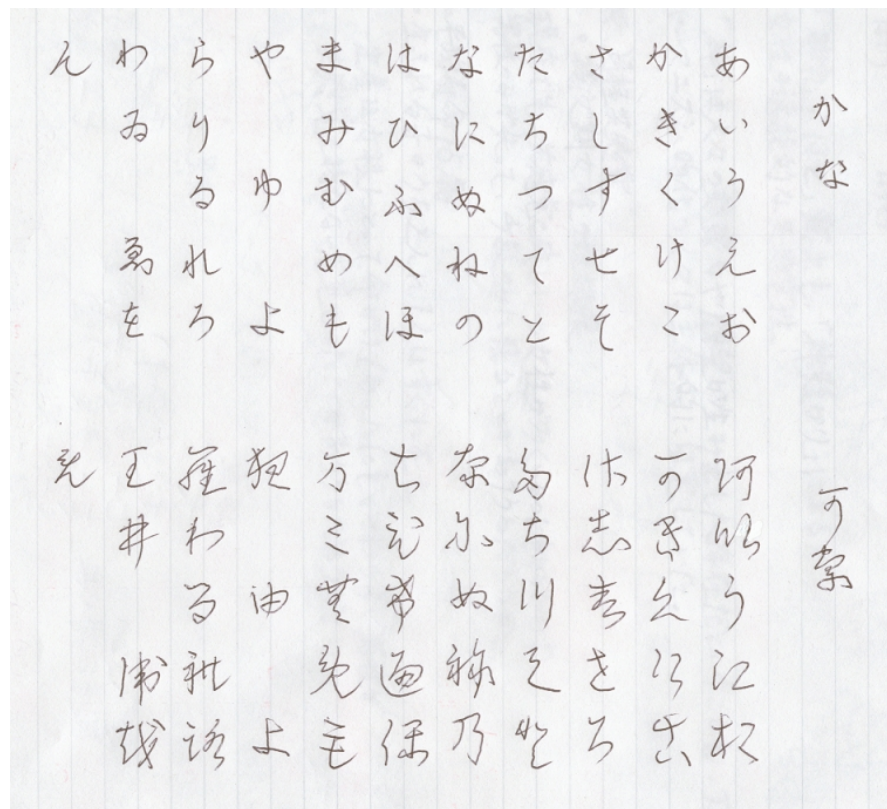
味に形がある

匂いに形がある

触感に色がある

人や物を見ただけで触れることができる＝ミラータッチ共感覚
など

ひらがな・カタカナ



ん わ ら や ま は な た さ か あ
る り む ひ に ち し き い
る ゆ め ふ ぬ つ す く う
ゑ れ め へ ね て セ け え
を ろ よ も ほ の と そ こ お

ン ワ ラ ヤ マ ハ ナ タ サ カ ア
ン 牛 リ ム ヒ ニ チ シ キ イ
エ レ ム フ ヌ ツ ス ク ウ
ヲ ロ ヨ モ ホ ノ テ セ ケ エ
オ

アルファベット・数字・音階

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789

1234567890



漢字

優憂欲谷
偽為歐區
借昔欠
信言闇音
体本閥伐
付寸閣各
人門

水無月 六月	皀月 五月	卯月 四月	弥生 三月	如月 二月	睦月 一月
夏至 芒種	小滿 立夏	穀雨 清明	春分 啓蟄	雨水 立春	大寒 小寒
師走 十二月	霜月 十一月	神無月 十月	長月 九月	葉月 八月	文月 七月
冬至 大雪	小雪 立冬	霜降 寒露	秋分 白露	処暑 立秋	大暑 小暑

立日心
立日心
音心
音心
意

黒灰紫青紺緑
黄橙茶赤桃白

窓越しに月おし照りて
あしひきの
嵐吹く夜は君をいかに思ふ



浮世の闇を
照らしてぞゆく

楷書で書くと色はどのように
変化するだろうか。

行書のまろみと色はどのように
変化するだろうか。

草書で書くと色はどのように
変化するだろうか。

書



書

逢はむ日の形見にせよと手弱女の
思ひ乱れて縫へる衣を
遠き方へ飛見はせよと手弱女
思ひ乱れて縫へる衣を
桜花咲きかも散ると
見るまでに
誰かも此処に見えて散り行く
うつには逢ふしもな
夢にだに
間なく見えぬ
恋に死ぬや

逢はむ日の形見にせよと手弱女の
思ひ乱れて縫へる衣を
遠き方へ飛見はせよと手弱女
思ひ乱れて縫へる衣を
桜花咲きかも散ると
見るまでに
誰かも此処に見えて散り行く
うつには逢ふしもな
夢にだに
間なく見えぬ
恋に死ぬや

余はぬけの雲しく月けき
川の中を流れても
おれはよふおれはよふおれはよふ

余はぬけの雲しく月けき
川の中を流れても
おれはよふおれはよふおれはよふ

おれはよふおれはよふおれはよふ
おれはよふおれはよふおれはよふ
おれはよふおれはよふおれはよふ

おれはよふおれはよふおれはよふ
おれはよふおれはよふおれはよふ
おれはよふおれはよふおれはよふ

共感覺繪画



臃親詭中形形彩密広教趣
 臃親枕形待悲枕草五孤悲
 臃語妨待待悲待教五閨悲
 親道悲待悲悲悲家其願癸
 造朝待悲悲原考美草親教
 造密贈悲原原考語建臃強
 林素道癸癸房枕素語臃広
 強家者新親親欲身落落朝
 美則寒形形甲形彩落語落
 即其寒癸悲房悲悲悲形落
 森建枕悲待房努姊悲間語
 密草枕悲待悲姊妨悲枕晚
 造語反悲原待妨待待枕願
 臃親反癸原待魂魂考考親
 新森草癸悲原贈考教慕建
 臃森臃密教教道五密密臃
 臃臃臃親新親臃臃臃臃

—紫陽花—

2007.7.22

■従来の共感覚への見方=wild, lunaticなど否定的、恐怖・不安・差別の対象

- 19世紀西洋の一般の人々は共感覚者を「野蛮で狂気」と見ていた。

Galton, Francis, *Inquiries into Human Faculty and its Development*. 1883.

London: Dent, 1911, 111.

- 「あなたが研究しているのは、精神遅滞者で脳ミソが無茶苦茶な人たちだ」と同僚から言われた。

Cytowic, Richard E, *The Man Who Tasted Shapes*. 1993. Cambridge, Mass.:

Bradford, 2003. s, 34

- 「共感覚をほめることは、人間の意識から牡蠣(カキ)の意識に戻ることを進歩と呼ぶようなものである」

Nordau, Max Simon, *Degeneration*: Translated from the Second Edition of the German Work. Lincoln: University of Nebraska Press, 1993, 142.

■現在の共感覚研究者の見方＝肯定的、実在の感覚と認める、個性、長所
いわば「乳幼児総共感覚者説」

●「少なくとも乳児は皆共感覚者であり、脳の機能分化が無い」

Maurer, Daphne and Maurer, Charles, The World of the Newborn, New York:
Basic Books, 1988

●「多く的人是大人になると共感覚を失うが、2000人に1人の割合で持ち続ける
人がある」

Marks, Lawrence E, Synesthesia: The Lucky People with Mixed-up Senses,
Psychology Today 9, 1975

●「乳幼児は五感の強弱だけを判断している。あるいは、少なくとも視覚と聴覚
の区別は無い」

Lewkowicz, David and Turkewitz, Gerald, Intersensory Interaction in Newborns:
Modification of Visual Preferences Following Exposure to Sound , Child
Development 52, 1981

やまとことば
(ほぼ訓読みのこと)

「色が身にしみる」(和歌)

「味を見る」

「音色を味わう」

「香りを聞く」(香道)

「柔らかない音」

「重々しい色」

＝幼児期・古代日本・先
住民社会では共感覚
が生活になじんでいた
(いる)のではないか

現代語
(ほぼ音読みのこと)

「色彩が身体に浸透する」

「美味を目撃する」

「音波の色彩を賞味する」

「香気を聞知する」

「柔軟な疎密波」

「重厚な可視光線」

“hear color(s)”

“see sound(s)”

＝wild(野蛮)、lunatic(狂気)
と言われた要因